

「能・不来子先生」を見て

江口 靖子

(国際俳句交流協会会員)

四月に予定されていた公演はコロナ騒動のために延期され十一月十八日の夕べに開催されました、千駄ヶ谷の三日月を垣間見る黄葉の道を国立能楽堂へ参りました。

「能・不来子先生」はブライス先生の靈力を借りその精神の真髄を無駄なく表現した舞台だと思いました。

自國で十八才の兵役を忌避し刑務所に送られ、更に日本に来られた戦時中には在留のまま神戸の敵国人收容所に収監される運命を辿りながら、「人を一人殺せば殺人罪、(戦争で)大勢殺せば英雄なのか」の言はブライス先生の信条を貫くものであり、この「能・不来子先生」の中心となるものだと思いました。

ヘンリー・ソローの精神は「我らが最も至福に満ちたる経験は深き後悔の類。その後悔とは感激の極み・・・聖なる絶望。絶望の中に救いあり。」

そして、鈴木大拙の禅の精神は「生死を超えて生くること。座禅は生きることの意味を教える。人間は互いに理解しあうべし」

ソローの精神については芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の、句が引用され「人生に意味あるは、その苦闘が絶望的なるときのみ。絶望の中にのみ光あり」と説かれています。

人生の大業に鈴木大拙氏の説く「靈性」が働くということなのかなと思つたりしました。

学習院大学・イギリス文学科の学生であった時、ブライス先生の「英詩研究」という講座を受講しました。

キーツ、イエーツ、ワーズワース等の詩を板書され、韻を踏む「行」や「語尾」の位置の説明、センテンス・ストレスの位置など熱心に教えて下さり、詩を朗読する声の表現で、作者の気持にどんなに忠実になれるかをお話しされたことを思い出しました。

ブライス先生の墓所は北鎌倉の東慶寺。冬桜が咲き、椿の花に栗鼠が戯れる東慶寺を、またいつか訪ねたいと思っております。

令和二年十二月